

『国際交流 —多様性の受容に向けて』

北海道通訳者協会(HICOM)会長

泉 園子 (いずみ・そのこ)



略歴: 函館市生まれ。1966年カナダへ両親とともに移住。トロント大学を卒業後帰国。札幌のビジネススクールや大学にて非常勤講師、道庁知事室国際交流課嘱託通訳員を経て、1989年からフリーの会議通訳者。北海道通訳者協会(HICOM)代表、現在は同協会会長同時通訳者。

地球の大テーマは多様性である。生物の多様性のみならず、ひとりとして同じ人間が存在しないように国として存在する領土には他国にないものが必ず存在する。しかし表面上に見える様々な姿の根底には他と共通する普遍的なものが必ずあり、私は「違い」より「共通性」を先に感じ取るタイプである。通訳者としてここ北海道で国際交流に二、三十年余りかかわってきたが、フリーで仕事を請けるたびに通訳する分野が異なる職種故に、私も多様性を常に意識しそれを楽しむようになった。多文化のモザイクとして知られるカナダで教育を受けたことも関係があるかもしれない。

津軽海峡を境に北海道の動植物の生息はブラッキンストン・ラインにより大きく変わると言われている。そのため北海道は外国のようだといわれる。北海道には軽やかで若々しい空気が流れている。本州は長い歴史に由来する重厚な空気が漂っている。私は北海道の今後の役割に関係するとおもわれる歴史的事実を常に念頭において通訳の仕事をしていただいている。それは日本の高等教育機関の中で初めて学士号を授与したのが、東大でも京大でもなく、北大(札幌農学校)であったということである。当時もっとも高いレベルの教育は北海道から始まったのである！歴史は繰り返されるのであろうか。今度ほどのような有意義な情報が北海道から発信されることになるのか楽しみにしている。高い意識レベルの情報を受け入れて発信するという役割があるのなら、ここは異国というより、異次元と表現したほうが合っているようだ。

北海道は従来じゃまものだった雪を活用し、宮様スキー大会、冬期期間中アルペンスキーワールドカップ富良野大会や冬季ユニバーシアード(1991)等を開催してきた。私もユニバーシアード札幌大会では役員の専属通訳員として期間中道内の会場を移動して回った。ある日、富良野会場から札幌へ戻る途中、農村地帯を車で通過していたときだった。ふとスイスの役員が「こんなところに住んでみたい」と語ったのだ。何も無いところだけど本当にここがいいの」と聞き返したほど私には意外なコメントであった。あきらかに私には見えてないものをスイスの役員は評価していた。今考えると私の感覚は、アジアの団体観光客が求める大型の一流ホテルに泊まり買い物を楽しみに来道するアジア人感覚だったことがわかる。しかし、スイスの役員は別なニーズを持つ個人観光客の立場から森の中にあるペンションなどに泊まり、田園風景を満喫したいタイプの観光客だ。観光促進には両方の路線が必要と思われる。

今月、国際微生物学連合2011会議が開催され4千人以上の研究者が世界中から札幌に集まった。人間の先祖は実は微生物であったのだが、その眼に見えない物たちが私達の身体、免疫、革新的な薬剤、地球環境改善にも深く関わっていることを市民公開講座にて通訳した内容から理解したが、まさにこの地球と人間は多種多様な微生物の集合体であると再認識した。

国際交流を家族単位で考えてみたい。国際人を育てる上で重要なのが、同じ屋根の下に住む家族一人ひとりがお互いの個性をどれだけ尊重できるかが原点のように思う。親が兄弟姉妹一人ひとりの個性を尊重する姿勢を見せ、相手を否定しなければ自分も否定されないということを幼いうちから学ぶ機会があると、異質なものに対して抵抗するより、積極的に外国の文化を採求しようという気持ちが芽生えるのではないかとおもう。「障がい」がある子供がいる場合は、一緒に生活することで、問題はニーズの違いがあることを理解できるようになり、社会で出会う人々のそれぞれの違いに寛容になっていくとおもわれる。

いわゆる「障がい」を多様な「ニーズ」として認識し、学習障がいがある人も普通に教育を受けられるようにする試みが米国を中心に始まっている。ユニバーサル・デザインを教育の現場に応用するUDLが北海道大学大学院教育学研究院で研究されている。教師がUDLを採用すれば、例えば、筆記試験が受けられない人も別な手段での評価方法が提供されことになるので、多種多様なニーズをもつ人々も大学(学校)へ行ける時代がやってくるということだ。やはり社会は多様性を受容した新しい社会の創造へと向っていると感じる。

今後も国際交流を通じて画期的な思想や情報が北海道にもたらされ、その結果、社会全般に大きな影響を与えていくのを見守るひとりの道産子通訳者であることを誇りに思う。